



シンガポール国立大学での暮らし

神戸大学 経済経営研究所

准教授 松本 陽一

2016 年 7 月末から 2018 年 4 月末まで、シンガポール国立大学（National University of Singapore）の NUS ビジネススクールに長期出張し、現地の研究者と共同研究を行ってきました。研究成果の公表にむけて、引き続き論文の改善に努めています。ここでは私が過ごしたシンガポール国立大学の日常をご紹介します。

シンガポール：言わずと知れた東南アジアの中核都市国家で、最新（2017 年）の一人あたり GDP は 55,235US ドルです（日本のそれは 38,428US ドル）。大変豊かな国で、ガス・水道・電気・インターネットなどのインフラ、あるいは鉄道・バス・道路網の整備などの生活環境に関して、日本と比べて不満を感じることはありません。むしろ鉄道やバスなどの使いやすさ（コスト・整備状況・時間の正確さなど）、スマートフォンによる決済の普及といった面において、日本よりも便利ではないかと思われる点は少なくありません。また、街を行き交う人々は一般的にとっても親切であり、とりわけ子連れの人に対しては非常に協力的です。最近の日本における話題との関連で言えば、シンガポールは隣国から安価な労働力を大量に受け入れていたり、カジノを含む統合型リゾート施設で有名だったり、良い面も課題も含めて参照すべき点は多いように思われます。とても狭い国（東京 23 区より少し大きいぐらい）であり、例えば食料品（飲料水を含む）を輸入に頼っている点は安全保障上の課題であると言われるようですが、生活者の視点で言えば、休日に出かける場所（少数の遊園地やショッピングモールを除く）さえ国外に依存する状況に、翻って日本の国土の豊かさを感じます。

シンガポールの四季：シンガポールに四季はありません。あるのは雨期と乾期で、雨期には涼しくなり、肌寒く感じることもあります。雨期の終わり頃（だいたい 2 月）に春節（中国のお正月）がやってきます。春節が終わると、一気に暑さが襲ってきて、あとは次の雨期まで暑さとの戦いです。5~6 月は 1 年で最も暑い時期で、従って最もつらい時期ですが、同時にフルーツが美味しい時期でもあります。ライチやマンゴーをずいぶん食べた記憶があります。お正月といえば、シンガポールではマレー系、インド系、太陰暦、太陽暦と年に 4 回の正月があります。8 月から学校の新年度がスタートして、そこから 12 月のクリスマス休暇まで、安定的な暑さが続きます。と、分かったようなことを書きまし

たが、実際には暑すぎて屋外を出歩くことはほとんどありませんので、日本のように肌感覚として季節を感じる訳ではありません。春節や中秋節などのイベントを通じて、季節の移り変わりを頭で理解します。頭で理解しますので、若者の中には12月ごろになると文字通りの冬服を着る強者もいて、心頭滅却すれば・・・ということなのかなと思います。

シンガポール国立大学ビジネススクール：シンガポールを代表するシンガポール国立大学はシンガポールの西の方、中心部からはタクシーで20分ほどの場所にあります。なにぶん広いので最寄り駅を言っても大した意味は無いのですが、あえて言うなら Kent Ridge もしくは Clementi が最寄りの鉄道（MRT）駅です。ビジネススクールというと日本ではMBA教育を行っている部署をイメージしますが、こちらではビジネス系の教育と研究を行う母体のことを指しており、学部、MBA、PhDの大別3つのコースがあります。私が滞在していたのは、その Strategy and Policy Department で、所属する専任教員だけで30人近くに上ります。他にも Accounting、Marketing、Management and Organization、Finance、Analytics and Operations の各部門があり、その規模と（隣接した研究分野の研究者の集積の程度という意味で）研究者の層の厚さは残念ながら日本の大学のそれをはるかに超えています。内部で生活していると、ビジネススクールとしてというよりもむしろ、部門ごとの結びつきが強い印象です。

研究の水準：Times Higher Education の世界大学ランキングでは大学全体が22位（アジア1位）、ビジネス・エコノミクス部門で16位（アジア2位）であり、アジアで最も競争力の高い大学の1つです。実際、同僚のだれかが世界的に著名な雑誌への論文掲載が決まったという話は毎月のように聞きますし、毎週水曜日に開かれる研究セミナーでは世界中（主に北米とヨーロッパ）から優れた研究者が講師としてしばしば招待されています。教員がテニユア（終身在職権）をえる要件（主要雑誌への掲載論文の本数など）は北米のトップスクールの水準に合わせていて、そういうトップスクールで博士号を取得した教員がテニユア取得にチャレンジしていますから、研究成果の水準は推して知るべしというところではあります。北米を中心とした有力大学の卒業生を教員として雇用することは、彼女／彼らの研究そのものだけでなく、そうした人材がもつネットワークを取り込むという点でも重要であるように思われます。それによって海外の有力研究者をセミナーに招き、人的な結びつきを強めて、新しい共同研究が始まる。そういう新規の国際共同研究プロジェクト生成メカニズムが日常生活に組み込まれています。

教員の暮らし：他の部署を含めて多くの教員が、大学に隣接する教員用のコンドミニウム

に住んでいて、シャトルバスで自分のオフィスに通っています。神戸では自宅（大学の宿舎）からオフィスまで、電車とバスを利用して1時間近くかかりますが、シンガポールでは15分といったところで、徒歩でも25分ほどで通うことができます。ここに住めるのは最長9年間で、その後は自分で家を探す必要があるそうです。教員の多くが高い水準の成果を求められる環境に置かれていますから、そういう人たちが集まったコンドミニアムとはさぞかし殺伐とした雰囲気なのではないかと思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、実際には日本よりもよほどゆとりのある生活を楽しんでいるように（少なくとも表面的には）見えます。多くの家庭で住み込みのヘルパー（いわゆるメイドさん）を雇っていて、彼女らは炊事・洗濯・買い物・子供の送り迎え等、なんでもしてくれますので、その分、雇い主は生活にゆとりが生まれるという面があります。また、雇用の流動性が非常に高いので、ここでテニユアを取れなくても他に就職先を探すことができるという気楽さが、生活のゆとりに結びついているようにも感じました。

日々の楽しみ：シンガポールといえば屋台風の飲食店が集積したホーカーセンターやフードコートが有名ですが、大学の学食も同じように小さな屋台が集まった形式をとっています。中国各地から来たらしい料理やら、インド各地の料理やら、マレー半島の料理やら、ベトナム料理、韓国、台湾、日本と、とにかく様々な料理があります。ちなみに、中国風の料理と言っても、日本でポピュラーな麺類や、ナントカ炒めを見かけることはほとんどありません。学食は大学のいろいろな所であって、それぞれ異なる店が入っていますので、同じに見える料理でも味は様々です。シンガポール人は長時間待つのをあまり苦にしないようですので、昼時になると人気店には長い行列ができます。口コミサイトを見るまでもなく、人気の有無は一目瞭然です。人によっては、わざわざシャトルバスに乗って遠くの学食までお昼ご飯を食べに行くそうです。